

みどりのこえ

春号
2018



No.56

長野県環境保全研究所

平成30年(2018年)3月15日発行

●飯綱庁舎 〒381-0075 長野市北郷 2054-120 TEL.026-239-1031 FAX.026-239-2929
URL: <http://www.pref.nagano.lg.jp/kanken/index.html> E-mail: kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp

山と里をつなぐ山岳科学をめざして

文 上野 健一



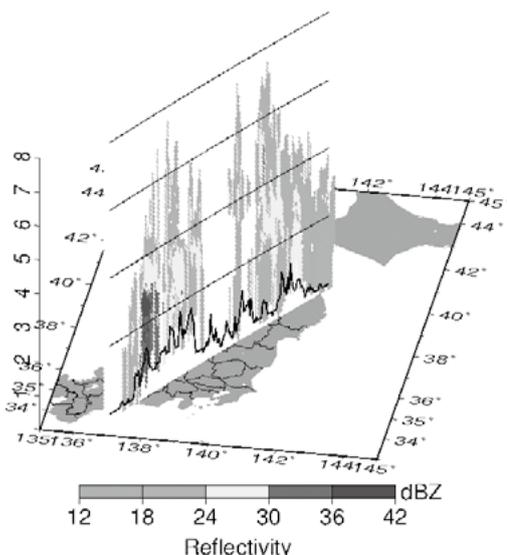
昨年、「山岳」という訳本を北大の渡辺先生と出版させていただきました。山の日のブースで販売していたところ、通りがかりの方が目次をパラパラとめくって一言、「面白そうな本ですけど、この手の内容は既に地元では当たり前のことですね」。どこかで、同じような会話をした記憶があります。そう、あれはチベット高原で降水の観測をしているとき、地元のチベット人が、「わざわざ観測なんかしなくても私たちに聞けばわかるものを」とつぶやいたことを思い出しました。おっしゃる通り、地元の方が現場で進行する環境変化に一番敏感であることは言うまでもありません。

私は東京育ちです。山岳気象の観測といってもデータの取得は測器にお任せで、現場に滞在して現象を体感する機会はほとんどありません。近年の数値シミュレーションや衛星観測技術の進展(図)はすさまじく、「ダウンスケーリング」や「データ同化」という手法を使って細分化した現象が手に取るように再現できるようになりました。そんな中、ニュースで流れる「気候変動」の何が現場にとって問題なのか、考える機会が多くなりました。コンピューターが再現する天候変動が、現地の人々が理解している環境変動とどのように整合し、何が食い違うか、研究成果を両者で共有し理解する取り組みがまだまだ不足しているように思えてなりません。

世界の山岳研究の動向を見ますと、高標高域で進行する気候変動が現地の人びとの暮らし、彼らが育む多くの資源や文化、観光や開発に大きな影響を及ぼし、さらにその影響が山麓・下流域へ伝播する事への懸念がたびたび議論されます。そして、「日本ではどうですか?」と聞かれるたびに返答に苦慮してしまうのです。「日本では海外のように山岳域

で暮らす人々は少ないですからね」と言ってみたものの、「里山というユニークなシステムがあるのではないですか」と切り返され退散です。自分の素養の無さを知らされるばかり。そんな中、昨年、学会で「雪かき道場」という活動を知りました。高齢者の雪かきを手伝うと申しでたところ足手まといだと断られ、なら「雪かきを教えてください」と頭を下げて門をくぐり、若手を地域活性に取り込むという雪国ならではの取り組みです。雪氷防災に関する現場の知恵を継承しつつ最新の技術普及もはかります。山と里をつなげる山岳科学を進めていく上で、一つのお手本となる優れた企画に映りました。

(うへの けんいち/筑波大学生命環境系准教授)



図：衛星から観測される山岳上のレーダー反射強度因子の鉛直分布 (JAXA共同研究、澤田壮弘氏作図)

Contents

【巻頭言】 山と里をつなぐ山岳科学をめざして	1	【フィールドノートから】	
【特集】 自然再発見! 「信州の山岳高原の歩き方」		気配を消して ~自動撮影カメラのメリット~	8
特集の趣旨	2	長野県初!の氷河 カクネ里	8
信越トレイル	3	【みどりのフカヨミ】 信州の自然をより深く味わうために	9
志賀高原ユネスコエコパーク	4	【信州自然ガイド No.4】 爺ヶ岳の自然	10
南アルプス(中央構造線エリア)ジオパーク	5	【こんなことやってるよ!】 上伊那農業高校バイテク班	11
山岳高原の歩き方、研究所の講座企画から	6	【読書案内】 南アルプス開拓の父「竹澤長衛物語」	11
フットパス (footpath)	7	【お知らせ】	12
早歩きですむ旅	7		